

## 大学院へ行こう

う蝕学分野 医員 大倉直人

「歯科医師になれたけど、どんな歯科医師になりたいのか？」

国家試験合格後、あるいはその前から誰もが抱える問題だと思いますが、みなさんはいかがでしょう（あるいはいかがでしたでしょうか）？僕は、大学院に入学する前にう蝕学分野に入局し、その後、レジデント、外部の長期出張を経てから入学しました。入学後は、楽しい思いも苦しい思いもしましたが、自分が目指す歯科医師像を長い時間をかけて探していました。そして、今年の3月に大学院を卒業し、それと同時に、ようやく理想とする歯科医師へのスタートラインに立てたのではないかと考えています。

さて、「大学院へ行こう」ということですので、少なからず、これを読んでくれている方は、進学に対して迷っている方もいると思いますので、少しそのことについて書きたいと思います。僕は、専門医を希望している方、あるいは基礎研究を選択している方にこそ大学院進学が適していると思います。それ以外の方は、開業医に就職する道を勧めます。治療技術の向上にはクオリティとクオンティティの両方が必須です。開業医では患者さんを診るチャンスは多く、早期の診断力・技術力向上が期待できます（院長によるファクタは無視しますが）。大学院での治療はクオリティにこだわることは出来ませんが、クオンティティが少ないため、数少ないデメリットの1つであると思います。また、「臨床家を目指す前に、研究を経験したい」といったニュアンスの事をよく聞きますが、これはお勧めできません。研究はそんなに甘くないですし、研究に興味がない人には、臨床も研究も同時に進行していくことはかなり辛いことなのです。

次に、当分野、う蝕学分野の大学院について紹介します。根管治療を専門とし、興地隆史教授の指導の下、臨床・研究に励んでいます。臨床における当分野の目玉は顕微鏡やNi-Tiファイルを用いた根管治療です。根管治療専門の歯科医院でないと、なかなか両方が揃った環境で治療をすることはできません。研修医時代から両方使用することができるのは、恵まれた環境です。さらに、MTA (mineral trioxide aggregate) を用いた臨床応用は、時代をリードする歯科治療材料の1つであり、これを自由に使用でき、その結果をダイレクトでわかるのは、当分野だけだと思います。また、興地教授をはじめ、毎日、外来には多くの経験豊富な先生がいるので、わからないところをリアルタイムで聞けるのは、安心して治療ができる体制であり、魅力的です。研究の面では歯髄再生治療の構築、細菌研究や新規材料の探索まで幅広く行うことが出来ますし、自由に選択でき、それを可能にする土壌があります。僕自身、「新規歯髄炎鎮静薬探索を目的とした薬物輸送経路探索」といったテーマで、興地教授、吉羽邦彦先生・永子先生に師事し、博士号を習得すること



学位記授与式に興地教授を囲んで（筆者左端）

ができました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。さらに、当分野は、4年かかる大学院カリキュラムを短縮して卒業される先生や、成績優秀者として卒業される先生ばかりです。これには理由があり、無駄のない高速の研究スピード、そして、論文発表へスムーズに移行できる指導体制が確立しているおかげです。さらには海外を含めた多くの学会へ参加できるところも他の医局に引

けをとらないところでしょう。

大学院進学は、良いところも悪いところもあります。進路に迷われている方々は、最後は自分に合った道を自分自身で決めなくてはなりません。その一助になれば大変うれしい限りです。末筆ながら、このような執筆機会を与えて下さった、担当の先生方にお礼申し上げます。



# 迷っているなら、大学院に行こう！

歯学教育研究開発学分野 特任助教 塩見 晶

学部卒業後6年目の塩見 晶です。平成26年3月に包括歯科補綴学分野（義歯診療科）大学院を卒業し、4月から歯学教育研究開発学分野（歯科総合診療部）に所属しています。「大学院へ行こう」というテーマを頂き、この文章が後輩の皆さんにとって大学院進学というハードルを下げる事ができたら幸いです。

私は実家が歯医者でもなく開業する希望もなかったため、学生ときは将来どこかしの個人医院に勤務するのだろうと漠然と想像していました。それは総診で研修をするようになっても変わらず、イメージははっきりしていませんでした。関東の開業医にいくつか見学（就活）に行ってみて、ここならマイペースな私でもやっていけるかもしれないと思う医院はありましたが、そこで働いている自分の姿を想像してみてもなんだかしっくりきませんでした。いっそのこと大学院へいってしまうのもアリかも。このあたりから大学院を意識し始め、経験者に聞くが早いと部活の先輩に話を伺うと、「開業医に就職した同期に比べれば診療数は少ないけれど、ひとつの症例についてじっくり取り組めるし、自分の専門分野を軸に診療方針を考えられるようになるよ」というアドバイスをもらいました。普段から他人の意見に流されまくり、軸がブレブレな私にとって、この言葉は魅力的に響きました。結局は他人の意見に流されたと言えなくもないですが、奨学金とアルバイトで両親から金銭的に自立できることもあり、大学院進学を決めました。

大学院博士課程は4年間です。前半の2年間は研修を修了したてで臨床志向だったため、外来診療と技工をメインに過ごしましたが、大学院卒業のためには学会発表と卒業論文がマストなので、後半2年間は自然と研究に費やす時間が増えました。

臨床については、「教授のアシストに付いて熟練

した診療手技を盗み、それを自分の診療で生かすことができます」と書きたいところですが、そこはやはり甘くありません。コンパウンドに翻弄され、咬合採得に悩み、人工歯排列に難渋します。しかし、そこをなんとなくで済ませるのではなく、周りの先生にその場で聞いて、納得がいくまで何度でも挑戦できるのは大学病院でなくてはできなかったと思います。人生初の上下総義歯製作で蟬義歯試適を3回も行ったのも良い経験です。

研究については、実は自分のやってみたくことができます。所属分野の研究しかできないという印象があると思いますが、臨床と基礎、そして分野の枠を超えての共同研究が行われています。この横のつながりも大学院の魅力のひとつだと思います。私の場合は、義歯を支持する粘膜組織の変化についてのメカニズムが解明されていないということに興味を抱いたことが研究テーマのきっかけとなりました。そして、院2年生から口腔解剖学分野で基礎研究を開始しました。ひとりの指導医と数人の大学院生で構成される研究チームの一員となって、細胞に毎日えさをやり、関連論文を検索し、実験結果に一喜一憂する、という辛くとも楽しい研究生生活を送ることができました。研究結果としては、義歯床下粘膜の変化についてほんの少し



包括歯科補綴学分野の同期と（筆者は左端）

解明できたかなと思います。

海外留学したいとか、専門医になりたいとか、大学院に進むには目標を持っていないといけないと思いませんか？しかし、私のように受け身で優柔不断な人間でも、大学院に入ってみると、多くの先生からアドバイスを受けながら入れ歯を作

ることができたり、海外の学会で研究発表することができたりするようになり、濃厚で有意義な時間を過ごすことができます。大学にいないとできないことを経験するために大学院に進む、というのはいかがでしょうか？



# 大学院に行こう

歯科矯正学分野 研究員 高 橋 功次郎

はじめまして。私はこの春、新潟大学大学院医歯学総合研究科を周りのたくさんの先生方に助けられ、無事卒業させていただき、晴れて学位を取得した歯科矯正学分野所属の高橋功次郎と申します。

まずはじめに、私が大学院を志望した動機を書きたいと思います。学生の頃から元々専門性の高い分野がいいなあと漠然と考えていました。実際の学部の授業科目では、口腔外科学と歯科矯正学に興味を持ち勉強していたのを覚えています。そして、国家試験の勉強に突入し、自分自身で深く掘り下げて勉強を進めるうちにさらに興味が増し、臨床研修期間は、進路選択の参考になればと考え、半年は病院歯科（口腔外科）、残り半年は新潟大学の歯科矯正学分野で臨床研修を行うことに決めました。どちらの研修施設でも大変かわいがっていただいたので、本当に悩みました。では、矯正科の大学院に進む決め手はなんだったのかな？と今思い返してみると、齋藤功教授はじめ、助教の先生方や同じ大学（奥羽大学）出身の先輩医局員の先生にたくさん相談に乗っていただいたり、たくさんご飯をごちそうになったり、1つ上、2つ上の先輩医局員の先生にも何度もご飯をごちそうになりました。私の書き方が悪いので、これを読んだ方はたくさんご飯を奢っていただいたから進路を決めたと勘違いされるかもしれませんが、もちろん否定はしません。しかし、真面目に書くと、学問として1番難しいと私が感じたからこそ、大学院に入学し、突き詰めて勉強しようと思ったのがきっかけだったと思います。

さてここからは大学院生となつてからの生活を紹介いたします。まず4月初めに、新人歓迎会というイベントで当科では師匠とよばれるライターとの顔合わせがあります。どんな先生が師匠になるのか緊張していたら、私の師匠は年も近く、大



変気さくな先生でした。さっそく次の日からは、二人三脚での外来診療に突入しました。具体的には診療のアシストから始まりだんだんと自分でやれることが増えていったら様々なことをまかせていただき、二人三脚といっても師匠にたくさん迷惑をかけてしまったので表現が適切ではないかもしれませんが、そのとき失敗したことや、注意されたことは今でも私の財産となっています。矯正臨床においては、基本的知識、技術の習得のため、ワイヤーベンディング、バンド実習、ろう着試験、技工物製作、タイポドント実習等を行いました。またそれと同時期に新人教育として各ライターの先生方からの講義がありました。矯正臨床に必要な知識を細分化し行われ、少人数で行われるため質問もしやすく、アットホームな雰囲気の中講義していただいた記憶があります。

研究面では、入局してから約2か月は自分なりに悩んだり、先輩に相談したり、基礎講座の先生方にも相談にのっていただきました。そして考え抜いて口腔生理学講座で山村先生、北川先生のご指導のもと研究をすることに決めました。元々、大学という研究機関でしかできない基礎講座での動物実験に興味があったことも決定した要因の1つ

です。指導教官の北川先生と二人三脚でゼロからのスタートでした。まず始めは留学生の先輩の実験のお手伝いからはじめ、実験の見学を通して器械の使用法、手技を学び、徐々に進めていきました。自分なりに頑張ったご褒美に歯科基礎医学会という基礎系の学会で発表させていただく機会もいただき、岡山県ではおいしいお酒と食事をいただくこともできました。また、学会の懇親会では、普段あまり接点がない他大学の基礎講座の先生方と交流させていただき、大変刺激になりました。

最後に、これから大学院進学を考えている方は、自分が興味のある講座等に気軽に相談に行くことをお勧めします。医局説明会にはいけなくても全く気にする必要はないですよ。大学院で自分がやりたいことが明確ならなおさらですが、研究には興味があるけど具体的にどのようなスケジュールで進めていくのか分からないような方でもきっと各講座の先生方は大歓迎で相談にのってくれるはずですよ !!

